

ひとはく 20 年のあゆみ

2014 年 10 月

兵庫県立人と自然の博物館



巻頭言

平成 24 年（2012 年）年 10 月、兵庫県立人と自然の博物館（ひとはく）は開館 20 周年を迎えました。20 周年を記念した式典では、秋篠宮殿下にご臨席賜り、20 年の活動に高い評価のお言葉をいただきました。

成長の時代から、心の豊かさや生活の質を重視する成熟の時代への転換が求められるなか、人と自然の調和した環境の創造をめざす研究拠点として人と自然の博物館は設置されました。館内に、兵庫県立大学自然・環境科学研究所を設置し、従来の博物館がもつ資料収集、調査研究、展示・普及に加え、データバンク、シンクタンク、学術交流等の機能をもつ新しい博物館として成果をあげてきました。

博物館活動の基盤となる資料収集・調査研究では、動植物から化石まで 130 万点を超える資料を収蔵し、1300 を超える科学的知見を発表してきました。近年では竜脚類化石「丹波竜」が新属新種であることを示し、世界の注目を集めています。

また、郷土の自然・環境・文化について学ぶ生涯学習拠点として、子どもから高齢者まで多くの人々に多彩なプログラムを提供しているほか、地域における生涯学習の担い手を養成しています。「ひとはくキャラバン」では、展示見学や地域の方々と連携したセミナーなどの開催をはじめ、20 周年を記念して移動博物館車「ゆめはく」を導入しました。県内のみならず、東日本大震災の被災地を訪問し、昆虫標本や恐竜化石など本物がもつ迫力やおもしろさを伝えています。

そして、ひとはくが力を注いできたのが、地域社会と強く結びつき、人と自然に関わる社会的課題の解決に取り組むシンクタンク活動です。行政や企業などの依頼に加え、県民や NGO・NPO と連携しながら、幅広い分野で専門的な調査・研究を行い、その成果を地域づくりに生かしてきました。

21 世紀は、「共生の時代」とも言われます。頻発する豪雨災害や野生動物による被害の増大は、自然との共生を軽視してきた私たち社会への警鐘なのかもしれません。今こそ、一人ひとりが自然の一員であり、自然に生かされていることを改めて認識し、豊かで美しいひょうごの環境を次世代に引き継いでいかねばなりません。

それだけに、人と自然をテーマにする「ひとはく」の役割はますます重要になってきます。これからも、ふるさと兵庫の自然に親しみ、学び、発見する拠点として、一層充実した活動を展開し、人と自然が共生する社会づくりを先導していきます。

県民の皆様のさらなるご支援とご協力を心からお願いします。

平成 26 年 10 月

兵庫県知事

井戸敏三



巻頭言

人と自然の博物館では、20年という節目にさまざまな事業を展開しましたが、そのうちには、20年の前半の10年と、新展開と銘打った活動を試みた後半10年とを総括し、今後の活動のよりどころにしようと意図するところもありました。総括の重点は、20年間の活動を真摯に自己点検することにあります。どちらかという印象を軸に取りまとめた部分は、市販本のかたちで、『みんなで楽しむ新しい博物館のこころみ』として20年目にあたる2012年9月に、研成社から刊行し、すでにたくさんの人に見ていただいております。その本でも、公式記録としての20年史は別に取りまとめであり、やがて公開する、と約束していましたが、この種の資料集の例に漏れず、完成までに時間をとり、このたびやっとまとめて公表するにいたしました。

自然系の博物館に期待される活動はたいへん広範囲におよびます。大学を高等教育機関と定義し、高等教育担当者には第一線の研究者としての資質を必要とする、という考えはひろく常識となっていますが、自然系博物館の館員の役割には、今でも、人によって期待するところにズレが見られます。一般的な定義では、人の学びを生涯を通じて支援し、科学の助けを必要とする事業に知的な支援を行うという役割を担うのですから、担当者は大学の教員以上に科学の第一線で活躍している人でないとその役を果たすことが出来ません。人と自然の博物館は、兵庫県立大学の自然環境科学研究所が設置されている場でもありますので、求められている資質がかたちの上でも明確に示されています。

20年目の節目にあたり、人と自然の博物館のおかれている立場を、初心に戻って再確認し、20年にわたってやってきたこと、やれなかったことを、項目を細分して記録しました。自ら設定している過剰とも見えるほどの日常活動の合間に整理した資料ですから、不足や偏りが無いとはいえませんが、それでもこれだけの資料の中から、人と自然の博物館がやってきたこと、やれなかったことは、自分たちにも見えてきますし、博物館に関心をもっといただく人々のご批判を仰ぐ材料にもなるものと思います。自分たち自身が、この実績から、今後にどのような展開を図るべきかを判断すべきですが、同時に、博物館を活用して下さる皆様方の建設的なご批判をいただくことで、よりよい博物館活動を構築することが出来ると思っております。忌憚のないご意見をいただき、私たちの社会のために、博物館の活動が実のあるものになるようご支援いただくようお願いいたします。

まとめた資料を総覧してみますと、わたしたち館員の活動は、それを支援して下さる方々、協働して下さる方々、それに活動に積極的に参加して下さる方々と一体になった時に成果をもたらすものであることが見えてきます。わたしたちは常に皆様方と一緒にあることを意識し、よりよい博物館活動を構築するようにと、まとめた20年史を前に誓いをあらためるところです。

平成26年10月

兵庫県立人と自然の博物館
名誉館長

目次

第1章 研究	1
1. 部門研究	1
1) 地球科学研究部門	1
2) 系統分類研究部門	1
3) 生態研究部門	2
4) 環境計画研究部門	3
5) 生物資源研究部門	3
2. 総合共同研究	4
1) 出発期 (1992～1994年度)	4
2) 発展期 (1995～2001年度)	4
3) 停滞期 (2002～2006年度)	4
4) 変革期 (2007～2012年度)	6
5) ひょうご恐竜・哺乳類化石プロジェクト	6
6) 研究活動支援	6
第2章 資料	11
1. 兵庫の自然史の記録としての資料	11
1) 系統分類研究部門	11
(1) 昆虫標本資料	11
(2) 植物標本資料	12
2) 地球科学研究部門	12
(1) 化石	12
(2) 岩石	12
(3) 鉱物	12
(4) はぎとり	13
(5) ボーリングコア	13
3) 生態研究部門	13
4) 環境計画研究部門	13
5) 生物資源研究部門	14
2. 研究への活用	14
1) 系統分類研究部門	14
(1) 主なコレクション	14
(2) 資料目録の作成とその概要	16
2) 地球科学研究部門	16
3) 生態研究部門	17
4) 環境計画研究部門	18

5) 生物資源研究部門	18
3. 事業への活用	19
1) 系統分類研究部門	19
2) 地球科学研究部門	19
3) 生態研究部門	19
4) 環境計画研究部門	20
5) 生物資源研究部門	21
4.外部からの受入	21
1) 大型コレクションの寄贈	21
(1) 動物(昆虫を除く)	21
(2) 昆虫コレクション	22
(3) 植物(菌類を含む)	22
2) 小規模な寄贈(個人)	24
(1) 動物(昆虫を除く)	24
(2) 昆虫コレクション	24
(3) 植物(菌類を含む)	25
(4) 化石	25
(5) 生物原図	25
5. 2章まとめ	25
第3章 生涯学習	27
1. 展示	27
1) 常設展示	27
2) 企画展示	28
3) 特別展示:昆虫記刊行100年記念日仏共同企画「ファールにまなぶ」展	29
4) ユニバーサル化	32
2. セミナー	35
(1) 新展開前	35
(2) 新展開後	36
(3) 一般セミナー	36
(4) オープンセミナー	37
(5) 特注セミナー	37
(6) 館外講師派遣	38
3. キャラバン	38
4. 幼児期の環境学習支援	39
5. 学校支援	40
1) 団体対応	40
2) 講師派遣	41
3) トライやる・ウィーク	42
4) 学校連携セミナー	43
5) 博物館実習	44

6)	教職員セミナー	44
7)	教材開発	45
8)	JST事業を活用した教材開発	45
9)	実践事例集	46
10)	小学校3年生の環境体験学習	46
11)	ボルネオジャングル体験スクール	47
12)	イベント	47
	(1) 夏休み理科相談室	47
	(2) 三田市中学校理科作品展	48
	(3) サイエンスショー	48
	(4) いきものかわらばん	49
6.	広報	49
1)	広報の変遷	49
	(1) 印刷媒体	50
	(2) 館報	50
	(3) 情報誌	50
	(4) ひとはく手帖(セミナーガイド)	50
	(5) うきうきカレンダー(館内イベント案内)	50
2)	WEB媒体	50
	(1) ホームページ	50
	(2) メールマガジン	51
3)	電波媒体(ハニーFM)	51
4)	記者懇談会	51
7.	来館者サービス	52
	(1) ミュージアムメイト	52
	(2) フロアスタッフ	52
	(3) はくぶつかんの日	52
	(4) オープンセミナー	53
	(5) フェスティバル	53
	(6) 夏休み無休開館・お正月開館	53
8.	担い手の養成	54
	1) 地域研究員養成事業	54
	2) 大学院教育への参画～高度な担い手の育成	54
	3) 共生のひろば	56
第4章 シンクタンク		59
1.	博物館のシンクタンクとは?	59
	1) 博物館がシンクタンク活動を求められる社会背景	59
	2) シンクタンクの目的	59
	3) 民間シンクタンクとの違い	59
	4) シンクタンク活動の類型	60
	(1) 質問対応	60
	(2) 委員会への参画	60
	(3) 課題研究の受託	60

(4) 調査・研究の支援	60
(5) 社会制度の整備	61
(6) 生物多様性施策への参画	61
5) これから求められるシンクタンク	61
2. ひとつのシンクタンク史 –成り立ちと20年の成果–	62
1) シンクタンクの変遷	62
(1) 黎明期（開館準備～開館）	62
(2) 試行期（開館から10年）	62
(3) 発展期（新展開以後～現在）	65
(4) COP10への出展	67
2) データで見るシンクタンク活動20年間の成果	71
(1) 行政・企業へのシンクタンク	71
(2) 市民団体・NPOの活動へのシンクタンク	74
3) シンクタンクを支える資料収集活動	75
第5章 連携	77
1. 資料・環境情報収集に関わる連携	77
1) 寄贈	77
2) リサーチプロジェクト	77
2. 展示室をはじめとする館内施設を活用した連携	78
3. アウトリーチ事業における連携	79
1) 主催事業	79
2) 共催・協力事業	79
4. ひとつフェスティバル	79
5. 人と自然の会とのあゆみ	80
6. 養成事業を通じた連携	81
7. 地域展開を通じた連携	82
1) 地域展開の経緯	82
2) 六甲山における連携	82
3) 淡路島における地学系の連携	83
4) 有馬富士公園における夢プログラム	84
5) ジオパーク	85
6) 北摂里山博物館	85
8. 施設間・組織間連携	86
1) 市町との協力協定	86
(1) 猪名川町との連携	86
(2) 加東市との連携	86

2) 博物館連携	87
(1) 西日本自然史博物館ネットワーク	87
(2) 県下各地の博物館施設・社会教育施設との連携	87
3) 企業との連携	89
9. 海外との連携	91
1) マレーシア国立サバ大学との国際学術交流活動	91
(1) マレーシア国立サバ大学熱帯生物学・保全学研究所と学術交流締結までの経緯	91
(2) 学術交流活動の主な成果概要	92
2) フランス・アペロン県との国際交流活動	92
(1) 交流活動の経緯	92
(2) これまでの交流活動	92
3) 昆明植物研究所との連携	93
 第6章 マーケティング&マネジメント	 95
1. 組織運営	95
1) 準備室以前	95
2) 準備室期間	95
3) 新展開以前	95
4) 新展開以後	96
2. 運営経費	98
1) 博物館予算の推移	98
2) 外部資金の導入	99
(1) 受託研究・分任事業	99
(2) 事業助成（民間助成）	99
 第7章 災害対応	 101
1. 阪神淡路大震災	101
1) 環境計画研究部の一連の対応	101
(1) 調査関係	101
(2) 支援活動	101
2) 地球科学研究部の一連の対応	101
2. 豊岡水害（16年度水害）	102
3. 平成22年度水害	103
4. 東日本大震災	104
1) 標本レスキュー	104
(1) 植物標本	104
(2) 地質標本	105

2) 河川環境復旧支援	106
3) キッズひとはくの派遣	107
4) 大洗町復興支援	108
インタビュー ～ひとはくの開館20周年によせて	111
資料 ひとはくの数値指標の変遷	119